

青年部員が先生となり、高校生と特産品を開発

事業者が教壇に立ち、高校生とともに地域の特産品開発を行う

プロジェクトが国東市商工会青年部を中心にスタートした。

青年部長に聞くその取り組みと成果とは。



青年部有志が双国校で行う特産品開発の授業。課外活動の一環ではなく、商業科のカリキュラムに位置づけられている

市と高校、商工会の3者が連携協定を締結

「青年部員の地域おこし協力隊メンバーが、国東高校の分校である双国校で授業を行っていることを知り、青年部の活動として学校に提案したのがきっかけでした」

そう話すのは、国東市商工会青年部長の今富正幸さん。新築住宅の施工やリフォームを手がける今富建築の2代目である。国東市商工会では今年1月、大分県立国東高校双国校と、国東市との3者で連携協定を締結。青年部有志が双国校で生徒に授業を行い、特産品開発を進めるプロジェ

クトをスタートした。商業科のカリキュラムに位置づけられた、れつきとした授業である。

ところで今富さんは、本業のほかに以前から地域おこしの活動に取り組み、工務店のメリットを生かした空き家再生事業を積極的に行っている。この取材を行った場所も、商店街で20年以上空き家になっていた店舗兼住宅。それを買ってリノーブルし、今年4月から民泊事業を行っているのだ。そのほか現在、空き家を活用したDIYのレンタルスペースをつくる計画も構想中だとか。

「小規模事業者を守るためにには商店街を再生することが大事」と語

地域の未来を担う
子どもたちに、まちの魅力に気づいてほしい



「地域おこしに大事なのはまず、地域の人が地域のことを知ること」だと、今富さん



店舗兼住宅を今富さんがリノーブルした民泊施設。1日1組限定

「市北部にある双国校は、1学年40人の定員ですが、定員割れが続いている。この事業が学校の魅力となつて生徒が増え、一方で、子どもたちに地域や商売の魅力に気づいてもらいたい。将来、私たちの授業を受けた生徒が、この商店街で創業してくれたら、こんなうれしいことはありませんよね」

鬼をテーマにしたチップスとバーガー

特産である七島蘭という蘭草を使った商品開発になる予定です」現在は縁の下の力持ちの今富さんも、事業を軌道にのせた再来年度には手を擧げるつもりだ。

9月下旬には、大分駅前で生徒たちが販売実習も行い、今後は、2事業者が自社で販売を行っていく予定だ。

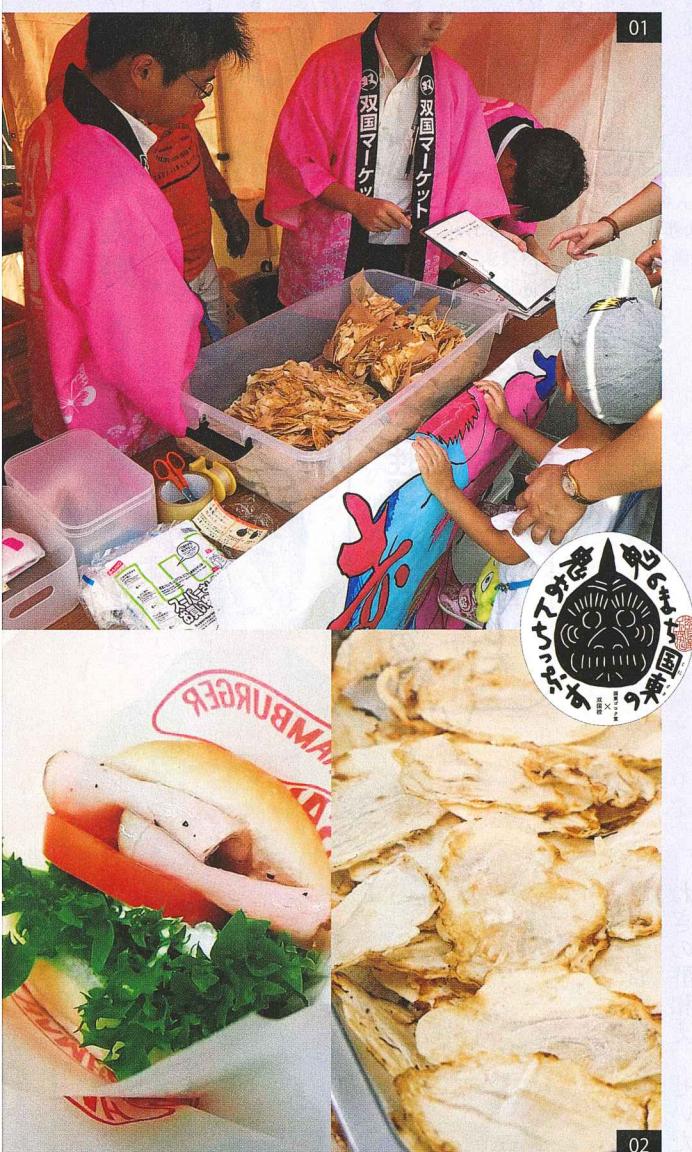
「建築という選択肢もありますが、空き家を活用した民泊のように地域で何かをシェアするソーシャルビジネスを、生徒たちと考えてもおもしろいのです」今富さんは、「都会に比べれば、国東の高校生にはないものばかり」だといつてはばかりない。しかし、「だからこそ、新しいアイデアが生まれる」のだとも考えている。

「双国校の生徒が考えたビジネスモデルが、世界を動かす可能性がないとはいえません。きっと斬新なアイデアが出てくるのです」青年部員と高校生との特産品開発はまだ始まつたばかりだが、今富さんが実感していることがある。それは、事業を通して、青年部員が成長できるということだ。

「自分の地域や事業についてわかりやすく伝えるのは、とても難しいことです。でも、それにより、気づかされることが多くあります。今回の2事業者さんも、そうだったに違ひありません」

特産品開発の初年度となる今年の授業は新学期の4月から、全学年の希望する生徒を対象に始ました。青年部員は、菓子店と飲食店の2事業者だ。それぞれが10名程度の生徒とチームを組んで、自らが販売する商品を開発すべく、担当教諭とともに、月数回の授業を行っていった。生徒たちは、地域の魅力を学び、事業者訪問で商品づくりの現場を体験するなどした後、特産品のアイデアを出していった。

そして完成したプロジェクト初の商品が、地元産玉ねぎを使った菓子店の「鬼おんちっぷす」と、地域のブランド豚を使った飲食店の「鬼バーガー」だ。今年5月に



01／生徒たちは実習として、大分駅前で販売を行った
02／地元産玉ねぎを使った菓子店の「鬼おんちっぷす」と、地域の
ブランド豚を使った飲食店の「鬼バーガー」。国東半島一帯には鬼を信仰する文化が息づいてきたことから名づけられた